

上野俊哉著 『思想の不良たち : 1950年代もう一つの精神史』

大場, 健司
九州大学大学院比較社会文化学府 : 修士課程

<https://doi.org/10.15017/1456073>

出版情報 : 九大日文. 22, pp.53-56, 2013-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン :
権利関係 :

上野俊哉著

『思想の不良たち』

——1950年代も一つの精神史——

大場 健司

本書は、雑誌『世界』の不定期連載「ストリート群島」に端を発して書かれたものである。扱われている「思想の不良たち」は、鶴見俊輔と花田清輝、きだみのる、安部公房の四人である。ジル・ドゥルーズ「キリストからブルジョワジーへ」にドゥルーズのその後の思想が見いだされるように、一九五〇年代の四人の著作には、六〇、七〇年代に花開く思想が宿っていると、上野氏は言う。序章「思想の不良たち」では、そのような五〇年代の戦後思想が、欧米の戦後思想との関連で「トランスローカル」に論じられている。「トランスローカル」とは、ローカルな文化の内部に、外部の文化との共通点を見いだす態度を指し、ポール・ギルロイも用いた言葉である。日本では一般に、ドゥルーズやガタリのフランス現代思想は八〇年代以降のポストモダン思想として受容されているが、その著作の多くは、日本の戦後思想と同時代の五〇、六〇年代に書かれたものであった。上野氏は日本の思想を、特に影響関係のない同時代の欧米の思想と比較しながら読み、「実際にはなかつたが、ありえたかもしれない」（二六頁）可能性を提示する。それがモダンの内

部にあるポストモダンなのである。そのような「多数派に抗する思想」（二六頁）が、敗戦後の「転形期」（花田清輝）に「思想の不良たち」によって形成された。自らの思想に首尾一貫して生きた彼らは、システムが規定した自らの「立場」に安住することを拒絶して、そこから逸脱し続ける。それは「転向」などではなく、脱構築的に「立場」の対立の意味を失わせる「転回」なのである。カルチュラル・スタディーズの論者として知られた上野氏が「カルチュラル・スタディーズの自己破門」（『二冊の本』二〇〇九年九月号、朝日新聞社）を発表して「転回」を行う時、上野氏は自らの思想に首尾一貫した態度をとる「思想の不良」なのである。

第一章「トランスローカルな転回と倒錯 鶴見俊輔」では、鶴見俊輔がその思想を、アメリカのプラグマティズムからの影響を受けながら、いかに形成したかが論じられる。かつてドゥルーズ&ガタリは『千のプラトール』において「リゾーム」を次のように説明した。

リゾームには始まりも終点もない、いつも中間、ものあいだ、存在のあいだ、間奏曲 *intermezzo* なのだ。樹木は血統であるが、リゾームは同盟であり、もっぱら同盟に属する。樹木は動詞「である」を押しつけるが、リゾームは接続詞「と……と……と……」を生地としている。この接続詞には動詞「である」をゆきさぶり根こぎにするのに十分な力がある。（序——リゾーム）『千のプラトール』上野邦一、小沢

リゾームが対立する二つのものを「と」で結びつけるように、鶴見はマテリアリズムとスピリチュアリズムを非弁証法的に結びつける。マルクス主義的なマテリアリズムが世界を一元的に捉えようとして自らの外部にある言説やスピリチュアリズムを排除するのに対して、鶴見の「マチガイ主義」は転向や「くである」立場からの逸脱に寛大である。他者からの「反証可能性」（ポバー）に自らをゆだねる鶴見は、精神／物質の対立をカッコに括り、共存させる。鶴見はウィリアム・ジェイムズのプラグマティズムを実存的に読み、物質性と精神性のあいだをたえまなく往還する。ここでは共同体外部の他者を排除しない「サークル」の可能性が提示される。

現実は無数にある可能性の一つとしての島にすぎない。トランスローカルな態度は、島を征服したりはせずに、渡り歩く。プラグマティズムの「アブダクション」が異なるものをカテゴリーから逸脱させて結びつけるものであるように、鶴見は遠く離れた島に類似性を見いだし、つながりを作りだす。このリゾーム的な接続をとおして「自分が、そして世界が他のものに生成変化すること」（六九頁）が目指される。この「群島としてある世界の肯定」（七二頁）にこそ、ドウルーズとプラグマティズム、鶴見の交差する契機があるのだと上野氏は論じる。この時、上野氏はおそらくドウルーズだけではなく、マルティニクの時人エドゥアール・グリッサンの「群島の世界」をモデルにして

いるのではないだろうか。

かつてジェイムズ・クリフォードは「民族誌的シムルレアリスム」において、人類学、民族学とシムルレアリスムのあいだに密接な関連性があり、この運動の担い手であったマルセル・モースらがポヘミアン的な「不良」であったことを論じた。これを受け、上野氏は花田清輝を、「夜の会」などでの脱領域的な運動から「民族誌的アヴァンギャルド」と呼ぶ。第二章「民族誌的アヴァンギャルド 花田清輝」では、花田の思想が社会運動やメディア論の観点から論じられる。おそらく、上野氏は浅田彰の次の発言を暗黙のうちに参照しているだろう。

花田清輝が前近代を媒介として脱近代に至るといえるのは、いまで言えば、バフチンのカーニヴァル論とマクルーハンの電子メディア論を結合させようというようなことではない。（浅田彰、柄谷行人、蓮實重彦他『討議』昭和批評の諸問題一九四五—一九六五）『近代日本の批評Ⅱ—昭和編』下巻、柄谷行人編、講談社、一九九七年一月）一〇八頁

五〇年代末に花田がメディアについて考える時、その念頭にあったのがサークル運動だったと上野氏は言う。サークルとは、ゆるい結社としての「アソシエーション」であり、花田はその組織化の過程に、古い社会体制が瓦解する「断絶」を見る。花田はこの現実には還元不可能な「物自体」の「特異性」を見いだすのだという。

上野氏はサークル運動における匿名的な協働に注目し、花田がこの匿名性を「人間の非人間への変身」において探求していたのだと論じる。資本主義社会での労働では、人間がモノのような存在として扱われ疎外されてしまう。花田は労働による非人間への変身を疎外論的には論じず、そこに「生成変化」(ドゥルーズ&ガタリ)のようなものを見いだす。つまり、人間が非人間的なモノとして扱われることで逆説的に「無名のノマド的で自由な特異性」(シル・ドゥルーズ「第15セリール 特異性」『意味の論理学』上巻、小泉義之訳、河出書房新社、二〇〇七年一月)一九五頁)が発見されるのである。ここには疎外を生き抜くための倒錯した思想があり、安部公房の変形譚を読み解くヒントがあるだろう。

花田によれば、狩野永徳の「洛中洛外図」は合戦図に似ており、カーニヴァルを思わせるのだという。花田は合戦とカーニヴァルに「見世物」としての同質性を発見する。そこで描かれていたのは「価値や信条、主義の異なる「他者」が互いに出会う場所」(二三二頁)で、国家権力の及ばない「潜在的な「公共圏」(二三三頁)であり、網野善彦「無縁・公界・楽——日本中世の自由と平和」の「アジール」を想起させる。上野氏はここに「前近代を踏み台にした超近代」(二三三頁)を見いだす。また、花田の思想に非暴力主義的でカーニヴァル的なデモの可能性が見いだされており、これは国家や資本に対抗する運動の指針になりうるだろう。

かつて柄谷行人は、きだみのるの『気違い部落周遊紀行』が「たんにありふれた日本の農村を、宇宙人が初めて見るかのよ

うに観察したもの」で「一読に値」すると高く評価した(柄谷行人「親の責任を問う日本の特殊性」『倫理21』平凡社、二〇〇三年六月) 三三頁)。第三章「「気違い部落」の民族誌 きだみのる」では、今日の社会学でもあまり正当に論じられていないきだの再評価が行われる。一九三〇年代にパリでマルセル・モースから民族学と社会学を学んだきだは、東京の外れの村落共同体をフィールドワークの対象に選んだ。ここで興味深いのは、きだが村落にある無住の寺を「不法占拠」して住んだことを、H・D・ソーロー『ウォールデン』におけるソーローの森での「不法占拠」になぞらえていることだろう。きだもソーローも、孤独な「ひきこもり」から逆説的に「公共性」を発見したのだという。

『フアーブル昆虫記』を林達夫と共訳したきだは、昆虫を観察するような目で、前近代的な共同体の内部に近代性を見いだした。「まれびと」のような存在として共同体に「歓待」されただきだは、そこにモースの「贈与論」で言うところの「互酬性」的な平等があることを発見するが、同時に「資本主義のせちがらさ」(一九七頁)という近代性をも発見する。また、村落での「じぐをまくこと」(働かないこと)には贈与の気前の良さと怠けることの競争の両方の要素があるという。上野氏はここに「権威的、官僚的な社会編成に抗う傾向」(一九九頁)を見いだし、アントニオ・ネグリらの「労働の拒否」の思想と結びつけて積極的に評価する。前近代的な共同体に回帰することなく「世間」から逸脱しようとしたきだは、トランスローカルなアナキストなのであった。

第四章「文学の工場 安部公房」ではまず、安部公房の作品には、『飢餓同盟』のように共同体に向かう傾向と、『他人の顔』のように孤独の中に閉じこもる傾向の二種類があることが示される。『飢餓同盟』は共産党のパロディであるだけでなく、一九五〇年代のサークル運動も反映しており、ジョルジョ・バタイユらの秘密結社「アセファル」と同じく陰謀結社のパロディだったことに、上野氏はオルタナティブの提起を見る。

『箱男』において、箱男は「カメラ・オブスクラ」を思わせる箱に閉じこもって覗きをする。箱男に名前はなく、箱の中の自己は空虚だが、そこで逆説的にかげがえのない特異性が発見されるといふ。ここには都市化がもたらす、アイデンティティなき「実存の領土」(分タリ)があるのだと上野氏は論じる。

また、『終りし道の標べに』の故郷を失った主人公にとって、阿片という「ファルマコン」(薬毒)が忘却された過去を呼び出し、「多としての一」の匿名性をもたらすのだという。

『他人の顔』を扱った箇所では、「顔」をテーマにして安部と花田清輝、J・P・サルトル、エマニュエル・レヴィナス、ジル・ドゥルーズの思想が比較される。主人公が「仮面」をつけて妻を誘惑する時、通常とは異なった関係性が生起する。つまり「通路としての顔」が、固定化した枠組みや規則そのものに異議を突きつけるのだという。また、作中のヨーヨーと、フロイト「快感原則の彼方に」に登場する「糸巻き」の類似性が示されていて、おもしろい。ここでは仮面／素顔の反復的な往還

をとおして、アイデンティティに執着しないで他者と関係することが描かれているのだと論じられている。安部にとって、自己と他者の理解しがたさを引き受けることが問題だったのだという。

終章「砂のカップル」では、安部公房『砂の女』が花田清輝やドゥルーズ&ガタリの思想との関係から論じられる。先行研究では、『砂の女』の砂漠は前衛党や共同体の隠喩だとされてきたが、上野氏は砂漠に自己と他者の関係の捉えがたさを見る。花田清輝がエッセイ「テレザ・パンザの手紙」で夫婦であると同時に同志でもあるテレザとドン・キホーテを描き、ドゥルーズが『ディアローグ』でガタリが徒党の一員であると同時に一人きりだと言ったように、『砂の女』の主人公と女は一緒に暮らしながらも互いに単独者である。その日常生活における同じことの反復が、そのつど一回的な特異性を生むのだという。

本書では一貫して、アイデンティティなき特異性や、立場からの転回、異なるものとのリゾーム的つながり、共同体外部の他者を排除しないアソシエーションが探求されている。近代が抑圧した、戦後民主主義や左翼思想の「もう一つの可能性」は、国家と資本に対抗するアナキズムとして回帰するだろう。

二〇一三年三月 岩波書店 三三八頁 二八〇〇円＋税

(九州大学大学院比較社会文化学府修士課程二年)